

群 教 セ	G03 - 02
	平25.251集
	中・道徳

# 郷土を愛する心をはぐくむ道徳教育の工夫

— 地域素材を生かした授業づくりと

考えを深める学び合い活動を通して —

特別研修員 茂原 真哉

## I 主題設定の理由

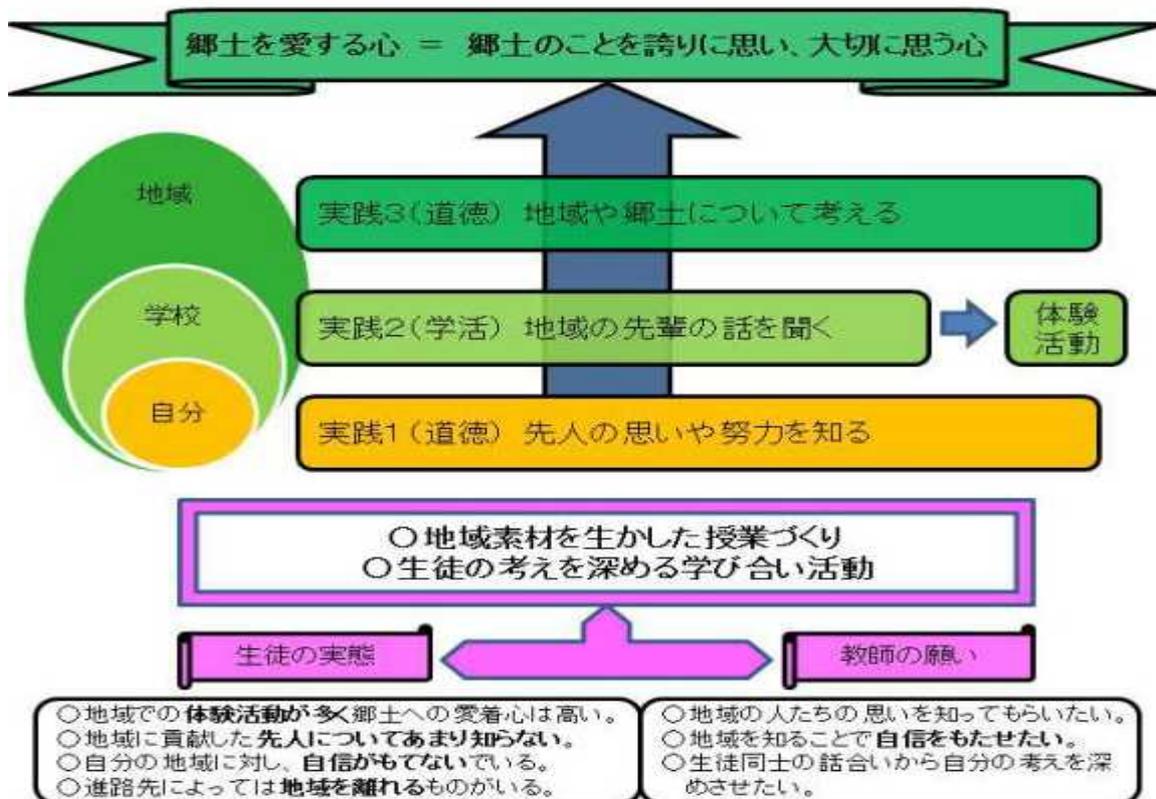
「はばたく群馬の指導プラン」では「道徳教育推進状況調査」において郷土愛に課題が見られたという分析があり、『大切に作る心』の育成に力を入れることが求められている。

本校の生徒たちは地域での体験活動は多いが、地域の歴史や先人についてあまり深く知らなかったり、自分の住む地域について自信がもてなかったりするという実態が見られる。また、本校のある村では、進学や就職のため、地域を離れる若者も多い。

そこで本研究では、郷土愛を『将来、生まれ育った郷土に住む、住まないにかかわらず、郷土のことを誇りに思い、大切に思う心をもって生きていくこと』ととらえ、「①先人の思いや努力を知る（道徳）」「②地域の先輩の話聞き、体験活動を行う（学活）」「③地域や郷土について考える（道徳）」という道徳と学活の授業を通して、郷土愛をはぐくみたいと考えた。さらに、それぞれの授業の中で地域素材を生かした自作資料と学び合い活動を手だてとして授業に取り入れ、郷土に対する思いを深めたいと考え、本主題を設定した。

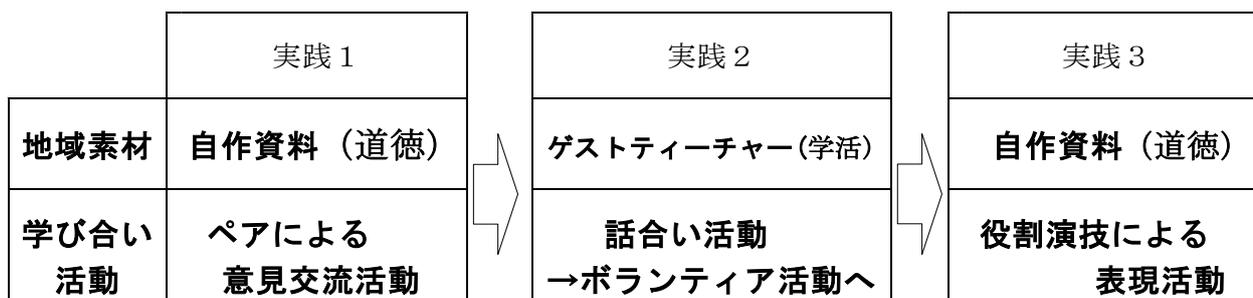
## II 研究内容

### 1 研究構想図



### 2 授業改善に向けた手だて

郷土を愛する心をはぐくむための手だてとして、道徳と学活の授業を通して、地域素材を生かした自作資料の開発・作成と地域の先輩（ゲストティーチャー）を活用し、生徒同士の学び合い活動により郷土に対する誇りや大切に作る思いを深めさせる授業を行った。



実践 1 では本校の講堂にあるグランドピアノを寄贈した故市川文太郎氏、息子の故市川文胤氏の思いや努力についての自作の読み物資料を作成し、活用した。ふるさとである南牧村を離れた文太郎氏がどんな思いを込めてピアノを寄贈したか、文胤氏が父の思いを受けてどんな思いでピアノを修理、寄贈したか、彼らの生き方を考えることで、生徒は先人の思いや努力を知った。また、中心発問ではペアによる意見交流を取り入れ、親から子へ受け継がれるふるさとを大切に心や住む場所を離れてもなお、ふるさとを思う心に気付くことができた。

実践 2 では学活の授業を行い、地域の先輩である南牧村山村暮らし支援協議会会長の金田鎮之さんをゲストティーチャーとして招き、地域が抱える課題や現状、現在活動しているボランティア活動などの話をいただいた。生徒は自分たちには何ができるかを真剣に考え、話し合い活動を行うことで、今、置かれている自分の立場だけでなく、自分たちの住む地域のことへと目を向けることができた。授業後には、実際に地域の方とふれあいながら、サルビアの花を咲かせ、育てるボランティア活動を行った。

実践 3 では生徒にとって身近な情景や自分たちが成長した姿を思い描けるような自作の読み物資料を作成し、郷土を思う気持ちや登場人物の生き方について考える授業を行った。生徒は二人の登場人物の心情を考えるとともに、どちらかの立場になり郷土への思いについて役割演技を用いて表現する活動を行った。この活動を通し、生徒は自己との対話をしながら、郷土への思いを重ね合わせることができた。

### Ⅲ 研究のまとめ

#### 1 成果

- 地域素材を生かした授業を行ったことで、生徒は今まで以上に地域を身近に感じ、地域の一員としての役割を考えるようになった。自分自身のことから地域に目を向け、その中で改めて自分自身を振り返り、自己の生き方を考えるなど郷土愛という学びを通して、心の成長が見られた。
- 自作資料は生徒にとって身近なもので、自分のこととしてとらえられるような内容で構成した。また、場面絵や写真を多く取り入れることで、生徒の想像や興味・関心を高めることができ、先人や登場人物の心情を考えるのに大きな役割を果たした。
- 意見交流や表現活動をすることによって、生徒同士の学び合いの中で考えに深まりが見られた。互いに意見を出し合い、新しい気付きが生まれたり、登場人物になりきって思いを表現することで優しさや温かみのある表現ができたりするなど様々な角度から郷土への思いを考えることができた。

#### 2 課題

- 生徒が考えをプリントに書き込む活動や考えや感想を発表する活動では、十分に時間を確保することが大切である。そして、できる限り多くの生徒との意見交流ができると考え方もより広がり、深めることができると思われる。

#### 3 提言

- 郷土に誇りをもち、大切にするためには道徳の時間を中心として郷土に関する学習や体験活動など教育活動全般と関連させながら、継続して様々な学び合い活動を取り入れていくことが必要であると考える。

#### IV 実践及び改善の実際

##### 実践 1

1 主題名 郷土に尽くした先人に学ぶ〔内容項目4－(8)郷土愛〕

資料名 『グランドピアノの音色』自作資料（出典 南牧村教育委員会「わたしたちの南牧」  
南牧村誌p1271～1272 上毛新聞2011.4.27 南牧村音楽祭講演会市川文胤氏2011.4.24）

##### 2 本単元及び本時について

○ 本時のねらい

「郷土に尽くした先人の思いや努力を知り、尊敬と感謝の念を深めようとする心情を養う」

本単元における自作資料は、地域に尽力した先人を取り上げ、教師が作成した読み物資料のことである。月形小・中学校（現 南牧中学校）にグランドピアノを寄贈し、講堂も建立した故市川文太郎氏と息子の故市川文胤氏を先人として取り上げる。生徒にとって身近な人物を取り上げた自作資料を活用することにより、地域の先人、地域の人々の思いや努力に共感し、郷土愛についての考えを深めさせたいと考える。

##### 3 授業の実際

##### 地域素材を生かした自作資料 『グランドピアノの音色』



寄贈



修理



市川文太郎氏

昭和13年 グランドピアノを寄贈

現在も使われているグランドピアノ

市川文胤氏

平成23年 グランドピアノを修理

##### ○自作資料のあらすじ

南牧村で生まれ育った市川文太郎氏は、中学一年の時（明治44年）、一家で南牧を離れ、東京に移り住んだ。幼き頃からの父の教えである「ふるさとへの感謝の思い」を大切にし、いつか自分でも村に恩返しをしたいと思っていた。昭和13年、南牧村にピアノがないことを知った文太郎氏はドイツ製のグランドピアノを月形小・中学校（現 南牧中学校）に寄贈した。また翌年、ピアノを置くための講堂も建立した。月日は流れ、講堂の落成70周年記念音楽祭に招待された息子の文胤氏は、壊れていたピアノの修理を快諾し、平成23年に改めて寄贈した。グランドピアノを通して、親から子へ受け継がれるふるさとへの思いをつめこんだ資料である。

導入の場面において、写真を提示した。生徒はグランドピアノ、講堂に飾られた二人の写真を見ると驚きと期待に胸をふくらませ、本授業への関心意欲が高まる様子が感じられた。

##### 関心意欲を高める導入の場面

T：この人（故市川文太郎さん）はだれでしょう。

また、何か知っていることはありますか。

S1：講堂の前に写真で飾られている人だ！

S2：校庭にある銅像にもなっているよ！

S3：たしか、ピアノをくれた人じゃないかな？



図1 導入の様子



図2 講堂

地域の先人を取り上げたことで、生徒がどんな思いをもっていたのか知りたいという意欲をもたせることができた。先人が幼少期に過ごした南牧村に対してどんな思いを抱きながら生きてきたかという状況や思いを知らせた上で中心発問につなげた。最初は自分の考えを書き、その後、生徒同士による意見交流活動を行った。友達のことを知り、話し合うことで先人の思いについて深く考えることができた。

### 中心発問までの流れとペアによる意見交流活動の様子

**発問** ○文胤さんの講演会での言葉を通して、文太郎さんの思いを知る。

T：もし、文太郎さんがここにいたら今日の音楽祭をどんな思いでみていると思いますか。

S1：苦労が報われた。

S2：南牧村に貢献できてよかった。

S3：息子の文胤さんにも感謝している。

**中心発問** 南牧中の講堂にあるグランドピアノはどんな音色がすると思いますか。

S1：きれいな音色。

S2：優しい音色。

○ ペアになって意見を交流しながら考えを深める。

T：友だちと自分で書いた音色について意見交流してみよう。

そして、どんな音色がするか、考えてみよう。

S1：ふるさとを思う気持ちが入った音色。

S2：代々受け継がれている思いが詰まった音色。

S3：たくさんの思いが詰まっているのできっと心に響く音色になっていると思う。



図3 ペアによる意見交流活動

終末では自分自身に置き換えて、振り返る活動を行った。生徒が書いた作文を用いて、自己との対話を促し、地域や郷土愛について意識付けをし、次の学活の授業へのつながりをもたせた。

### 自分自身を振り返るための終末の工夫

T：今日の授業を振り返って、グランドピアノがどんな思いを込められて、どのように寄贈されたかわかったと思います。今日の授業で考えたこと、話し合ったことをこれからもずっと忘れないでください。最後に、みなさんに作文を紹介します。

私が村のためにできることって何だろう。これは、私が最近よく感じることです。中学二年生のとき、私は自分の住んでいる地域の良さを改めて知り、地域と共に生きていくことを考えました。そう考えてから私の中には一つの疑問が浮かぶようになりました。

「村と共に生きるなら、私が村にできることって何なのだろう」ということです。私はそれから、村のために自分ができていることを考えるようになりました。

図4 生徒が書いた少年の主張の作文（一部抜粋）

## 4 考察

- 導入での写真や自作の読み物資料は生徒にとって身近で興味・関心が高められるものであった。そのため、先人の思いについて一生懸命に考える姿が見られた。
- 中心発問に対する生徒の考えが「きれいな音色」や「優しい音色」など一言で表す簡単な答えだけでなく、意見交流でいろいろな考えを出し合うことで、「思いの詰まった音色」や「心に響く音色」などに変容した。先人の思いや努力など全ての要素がこの活動でより深まったと考えられる。

### 実践3

1 主題名 郷土を愛する心を大切にする〔内容項目4－(8)郷土愛〕

資料名 『サルビアの咲く公園で』自作資料

### 2 本単元及び本時について

○ 本時のねらい

「登場人物の郷土に対する思いを考えることを通して、自分の住む地域や郷土に、誇りや感謝の気持ちを持ち、力強く生きていこうとする道徳的実践意欲を養う。」

本単元における自作資料は、郷土愛について考えさせるために教師が作成した読み物資料のことである。本校の生徒は地域に対する愛着心やボランティア精神は比較的高い。実践2の学活では、地域の先輩の話を聞いた後に、サルビアの花を植えるボランティア活動に参加するなど、地域と密接に結びついた活動も多い。その一方で、自分たちの住む地域に対し、誇りや自信をもてないという面が見られる。

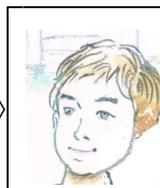
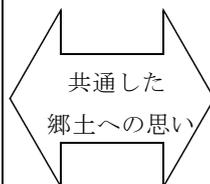
そこで、本資料は郷土のことを思う二人の若者がそれぞれの人生を歩む中、自分たちの手で作った公園で子どもに郷土について思いを語るという資料を作成した。生徒にとって資料中の大学生や、子どもに思いを語る大人の姿は将来の自分のこととしてとらえられる。また、生徒にとって馴染みの深いサルビアや村での情景は想像力をかき立て、自己の生き方を考える上でも共感できるものとなっている。

### 3 授業の実際

#### 地域素材を生かした自作資料『サルビアの咲く公園で』



遠くに離れて住んでいても友達である広樹や幼い頃に住んでいた村のことを片時も忘れない賢治



ずっと村に住み、村のために青年部でも活動し、村のことをいつも気にかけている広樹

○自作資料のあらすじ

村を離れて生活する大学生の賢治と村に残って生活する広樹が久しぶりに再会した。しかし、些細なことから意見がすれ違ってしまふ。そんなとき、二人はお互いに郷土に対する愛着や感謝の心を持ち、生活していることを周囲の人から知る。すれ違った意見のまま、賢治は村を離れる。しばらくして広樹のもとに賢治から一通の手紙が届く。設計の仕事を頑張っている賢治の思いが書かれた手紙を読んだ広樹は、自然と笑みこぼした。互いの郷土への思いを知りつつも月日は流れ、八年後のある日、二人は再会を果たす。公園で遊ぶ自分子どもたちの姿を見ながら、子どもたちに郷土に対しての思いや自分たちが歩んできたこれまでの生き方について語る資料である。

導入の場面において、ボランティア活動で体験したサルビアの写真を提示した。生徒は体験を振り返りながら、地域の人々の思いを考え、興味・関心をもって授業にのぞむことができた。

#### 興味・関心を高める導入の工夫

T: このサルビアにはどんな思いが詰まっているでしょう。

S1: きれいに咲いて欲しいという思い

S2: 一生懸命育てた地域の女性部の人たちの思い

S3: 苗を植えた南牧中のみんなの思い



図5 サルビアの花

自作資料を読み、登場人物の確認をした後、中心発問につなげるための発問1, 2を行い、生徒は賢治と広樹、それぞれの思いを考えることができた。そして、中心発問で生徒はどちらかの立場（気持ち）になって思いを考え、登場人物の心情について役割演技をしながら表現する活動を行うことで、思いをより深めることができた。

中心発問までの流れと役割演技による表現活動の様子

**発問1** 賢治は、なぜ広樹に何も言わずに出て行ったのでしょうか。

S1：広樹は村のために頑張っているのに自分は何をしているのかと情けなくなったから。

S2：広樹に顔向けできなかったから。

S3：もう一度挑戦する勇気をもらい、すぐに行動に移したかったから。

S4：頑張っているだろう賢治の様子を想像できて、嬉しかったから。

**発問2** 手紙を読んだ広樹はなぜ自然と笑みがこぼれたのでしょうか。

S1：自分と同じでふるさとを大切にしている思いをもっているのがわかったから。

S2：会うのが楽しみになったから。

中心発問 賢治と広樹、どちらかの立場（気持ち）になって子どもに思いを語ってみよう。

この村は自然がとても豊かな村なんだ。でも、だんだん子どもが減ってきてしまった。僕も村を出て東京へ行ったんだ。それからしばらくして、村へ帰ってきたとき広樹たちが協力してつくった公園ができていた。僕も負けられないと思って設計の仕事についてみんなが楽しめるすべり台を作ったんだ。



お父さんが子どもの頃はここは雑草だらけだったんだよ。この村も若い人が少なくなってきてしまった。だけどこの村に住んでいる少しでも多くの人にこの村をいい村だと思ってもらいたい、少しでも多くの子どものこの村のすごいところを発見してもらったり、好きでいてほしいからこの公園をつくったんだ。

賢治の立場で書いた生徒の文

図6 場面絵

広樹の立場で書いた生徒の文

もし自分がこの村を離れる事になっても、いつか自分の育った村の人達に喜んでもらえるような活動ができれば良いなと思いました。また、自分の育った村のために何かをするという事はすごく大切なので、離れた所にいたり、別れてしまった友達がいれば、またその友達と協力して村のために何かできれば良いなと思います。また再び協力したいです。



終末での生徒の感想

図7 役割演技による表現活動

4 考察

- 生徒たちは今回の授業を通して、今まで何となく過ごしてきた地域に対して興味をもち、地域のことを知ることで、地域やふるさと、郷土とは何かを考える様子が見られた。また、自作資料を通して様々な生き方を知り、今後自分はどうのように歩んでいきたいのか、真剣に考えることができた。
- 役割演技によって登場人物の気持ちや友達の考えに共感することができた。学び合い活動は、考えを深めるための有効な手段であったと考える。